暮らしの視点(5)

既婚女性の約7割が経済的なピンチを経験

― お金の相談先は「夫」より「親」？―

主任研究員　北村　安樹子

＜既婚女性の頼り先は？＞

既婚女性では、成人した子どもが結婚したかどうか、親元を離れたかどうかにかかわらず、「家族の一員」だと考える傾向が強まっている*1。また、こうした傾向は息子より娘に対する意識で近年顕著にみられ、以前からそのように考える人の多かった息子とほぼ同じ水準になった。この背景には、親にとって娘は、成人して以降も、親子のコミュニケーションを楽しみ、精神面など多様なサポートを期待できると考える人が増えていることもあるといわれる。

今回は、既婚女性の親との関係に注目し、困ったときの頼り先に関する調査結果から、子どものケアなど、「夫」を頼る人が増えている分野がある一方で、経済面や精神面など「親」を頼る人が増えている分野があることを紹介し、結婚した女性における親とのつながりの継続という点について考えてみたい。

＜既婚女性の約7割が経済的なピンチを経験＞

国立社会保障・人口問題研究所が全国の既婚女性を対象として行っている「全国家庭動向調査」には、経済的に困ったときの頼り先についてたずねる設問がある。その結果をみると、「自分の親」が最も高く、「夫」、「夫の親」がこれに続いている（図表１）。家族・親族以外の選択肢をあげた人は少数となっている。また、自分の親をあげた人の割合は、夫の親をあげた人の割合を大きく上回っている。

「経験がない」と答えた人を除く、経済的に他者を頼った経験がある人はおおむね７～８割前後となる。子どもがいない人では経験がない人の割合が高い一方、年代や就労状況別にみた場合、大きな差はみられない。「経済的に困ったとき」が具体的にどのような事態を指すのかについてはたずねられていないが、このような経験が子どものいる既婚女性にとって比較的身近であることをうかがわせる結果とみることもできるだろう。

＜「子どものケア」領域では「夫」を頼る人が増える傾向＞

この設問を含めて、子どもがいる人の頼り先に関する回答の推移をみると、「夫」と答える人が増えている設問と、「親」と答える人が増えている設問がみられる。前者には、「妻が病気の時の子どもの世話」が該当し、「夫」をあげた人が半数を超える（図表２）。この割合は、「親」を20ポイント近く上回り、過去の調査から微増傾向にある。

図表１　経済的に困ったときに頼る人（年代別、子ども有無別、就労状況別）

（単位：％）

	n	経験がある	家族・親族						家族・親族以外	頼る人がいない・いなかった	経験がない
			あなた	夫	あなたの親	夫の親	きょうだい（義理を含む）	その他の親戚			
全体	4,949	75.3	0.8	19.3	36.7	9.6	2.6	0.4	2.0	4.0	24.7
＜年代別＞											
29歳以下	145	77.9	0.7	23.4	41.4	9.0	－	－	－	3.4	22.1
30代	735	76.3	1.1	18.9	36.9	12.7	1.1	0.5	2.0	3.1	23.7
40代	1,115	77.8	0.9	16.7	40.5	10.9	2.0	0.3	2.2	4.4	22.2
50代	1,060	74.9	0.7	18.4	39.3	9.1	2.4	0.3	1.4	3.4	25.1
60代	1,156	74.3	0.7	19.7	35.0	9.1	3.7	0.3	2.2	3.6	25.7
70歳以上	738	71.8	0.5	23.6	28.6	6.0	4.1	0.7	2.7	5.7	28.2
＜子ども有無別＞											
子どもあり	4,381	76.8	0.7	19.0	38.1	9.9	2.5	0.4	2.1	4.1	23.2
子どもなし	419	55.4	1.0	20.0	22.2	5.7	2.4	0.5	1.0	2.6	44.6
＜就労形態別＞											
常勤	870	73.1	1.1	18.5	37.5	8.5	1.8	0.6	1.8	3.2	26.9
パート	1,372	79.2	0.8	17.6	41.2	10.7	2.3	0.1	1.7	4.7	20.8
自営・家族従業者	400	80.0	0.5	19.3	37.3	13.0	3.8	0.3	2.0	4.0	20.0
仕事なし	1,933	72.5	0.6	20.1	33.7	8.6	2.9	0.5	2.4	3.7	27.5
その他	169	73.4	0.6	22.5	30.2	11.2	1.8	－	0.6	6.5	26.6

注１：調査対象者は全国の結婚経験のある女性のうち配偶者がいると答えた計6,142名。掲載数値は、優先順位の１位に関する回答結果から、不詳者を除外した再集計値。経験がある人の割合は、「経験がない」以外の選択肢をあげた人の割合。

注２：設問文は「次のようなとき、これまでだれ（どこ）に相談したり手助けを頼んだりしましたか。優先順位の高い順に２つまで、下の選択肢から選んでお答えください」。なお、「家族・親族以外」の数値は、選択肢８～13の合計割合。

１.経験がない、２.あなた、３.夫、４.あなたの親、５.夫の親、６.きょうだい（義理を含む）、７.その他の親戚、８.親戚以外の知り合い・友人、９.保育所・有料預かり施設など、10.病院（医師）・保健所（保健師）など、11.市町村役場・公共機関など、12.書物やインターネットなど、13.その他、14.頼る人がいない・いなかった

資料：国立社会保障・人口問題研究所『第６回全国家庭動向調査報告書』（2020年３月）より作成。

＜「出産・育児相談」「お金」領域では「親」を頼る人が増える傾向＞

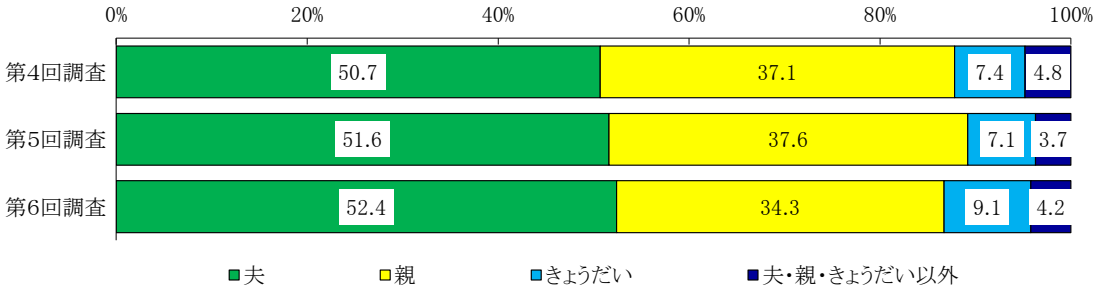
一方、後者には、先にみた「経済的に困ったときに頼る人」のほか、「出産や育児で困ったときの相談」などが該当する。これらの設問では「夫」をあげる人の割合を「親」が上回り、10年前に比べて微増する傾向にある（ただし、経済的に困ったときに頼る人に関しては、第４回調査からは増加したが、第５回調査からは微減し、一貫していない）。

これらの結果は、既婚女性からみて、成人した子どもが結婚したかどうか、また、

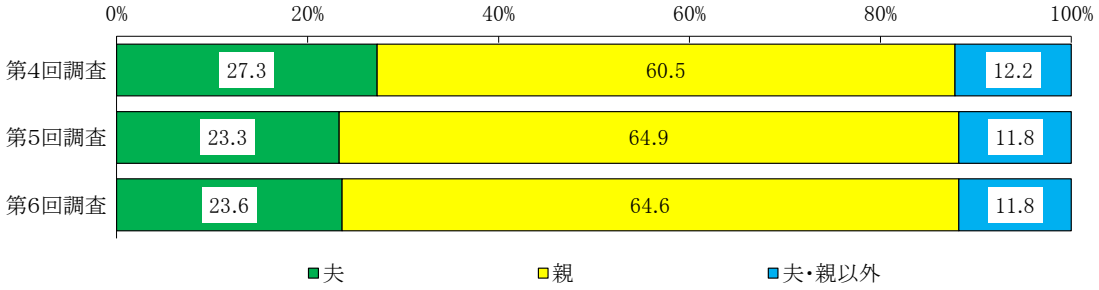
同別居にかかわらず家族の一員であるという考え方が広がり、それらが近年娘において顕著にみられることと整合性がある。その背景には、親にとって息子より娘の方が、親子のコミュニケーションを楽しみ、精神面の多様なサポートを期待できると考える人が多いことに加えて、結婚し、母親となった娘にとっても親が重要な相談先や頼り先であり続けるケースが増えていることもあるのではないか。

図表2　支援の頼り先に関する子どもがいる既婚女性の回答（前回、前々回調査との比較）

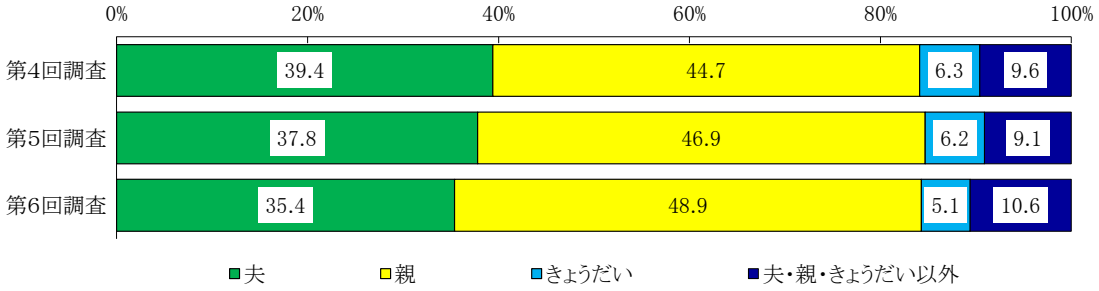
【妻が病気のときの子どもの世話】



【経済的に困ったときに頼る人】



【出産や育児で困ったときの相談】



注　：70歳未満の子どもがいる女性に関する再集計値。第４～６回調査はそれぞれ2008年、2013年、2018年の実施
資料：国立社会保障・人口問題研究所『第６回全国家庭動向調査報告書』（2020年３月）より作成

（ライフデザイン研究部　きたむら　あきこ）

【注釈】

*1：北村安樹子「暮らしの視点(2)　既婚女性からみた家族の範囲 ― 結婚しても、しなくても家族のままの『息子』や『娘』 ―」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/wt2009c.pdf